太平記

大森北義◇島田雅彦

新潮古典文学アルバム

太平記

大森北義◎島田雅彦

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮古典文学アルバム

太平記

大森北義
島田雅彦

「後醍醐天皇画像」（清浄光寺蔵）。真言密教に深く帰依していた天皇らしく、密教の勤行のための装束をし、手にはその道具・五鈷杵と五鈷鈴を持っている。

一切の価値がぐらついたあの時代に

島田雅彦

この南北朝時代の説教臭い軍記物語は一体誰によって書かれたのか？　百科事典には法勝寺の僧、恵鎮が編集し、天台の学僧、玄慧が監修したと書いてある。少なくとも、一人の作者の手によって始めからしまいまで書き上げられたのではない。『太平記』として一応の完成をみるまでには三十年くらいかかっているようだ。そのあいだに内容の誤りを正すべく、加筆、削除、修正がほどこされ、一時執筆が中断したりしながら、敗残兵や遁世した物語僧らが執筆に参加し、四十巻物として完成した。

複数の執筆者によって作られたテクストはその構成が自ずとポリフォニックになる。直線的な物語構成は随時、

四天王寺。鎮護国家のための寺であった四天王寺で、楠木正成は天皇親政を確信したが、またヨウレボシなどもこの寺で見られ、国の騒乱を世に示したりもした

変形され、ずらされてゆく。物語の合い間に中国の古典からの引用や説話的なエピソード、複数の作者たちの意見や儒教的道徳が折り込まれ、テクスト自体が錯綜としている。軍記物語を書こうとしたら、このような混乱したテクストができてしまったという感じだ。ところどころに物語僧たちのでっち上げや編集者による説話の寄せ集めがあったとしても、この物語の価値は変わらない。それぞれに思惑もあり、時に欲望をさらけ出す下剋上の動乱を背景に活躍する登場人物たちを物語の中につなぎ留めておくためなら、どんな文学的なトリックも許されるだろう。

実際、『太平記』には一筋縄ではいかないならず者たちがたくさん登場する。その一人が後醍醐天皇だ。鎌倉幕府の末期、古代天皇制の危機を誰よりも感じていたのは後醍醐天皇である。下剋上の世の中ではあらゆる職種一代限りのものとなりつつあり、天皇職も例外ではなかったのだ。後醍醐自身、中継ぎの天皇であったから、新たな直系を創出し、天皇専制を実現すべく、自ら下剋上のヒーローとなろうとしたのである。

巻の十一で北条の幕府は滅びる。「六波羅は容易に攻略できても、筑紫と鎌倉は十年二十年の月日を費しても征

「融通念仏縁起」(清涼寺蔵)。様々な人が描かれているが、中世に横行した悪党といわれる人々の様がよくわかる

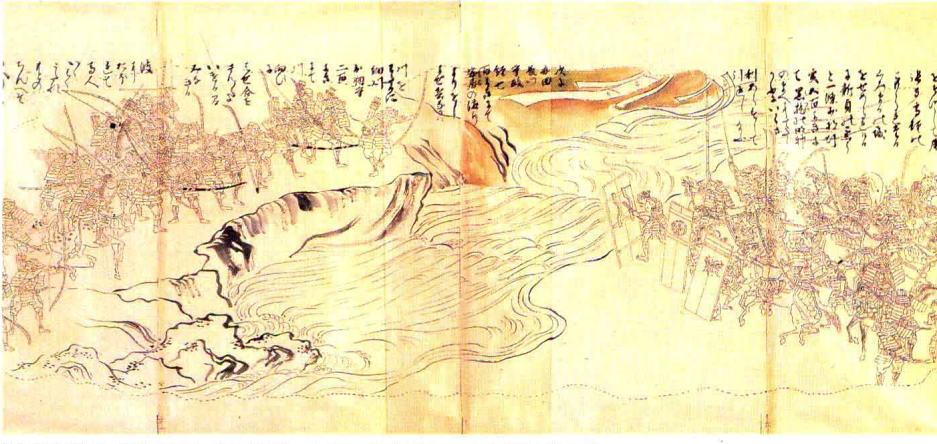
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

討できないと思われていた」北条一族もしめし合せたように戦さが起き、わずか四十三日で滅びてしまった。後醍醐天皇による周到な計画と楠正成の活躍に負うところが多かったというわけだ。

ところで現代に後醍醐天皇の容姿を伝える有名な肖像には異様なムードが漂っている。何と後醍醐は密教の法服を着、祈禱用の道具を両手に持っている。この天皇は護摩をたいて、幕府を打倒する祈禱をしていたのである。『太平記』の巻の八に記録がある。後醍醐は京都をうまく攻略できないでいる自軍にいらだっている。

船上（ふなのうへ）の皇居に壇を立てられ、天子自ら金輪（こんりん）の法を行はせ給ふ。

自分が持つ超能力をフルに発揮して、権力を掌中にしようと企てていたのだ。巻の十二から早速、建武の新政に対する不満が書き連ねられる。『太平記』には文観という密教僧の暗躍が描かれている。文観は楠正成を後醍醐に加担させたり、天皇の討幕の祈禱にも協力している。その貪欲ぶり、狡猾（こうかつ）さは当時の人々の憎しみを買っていたようだ。

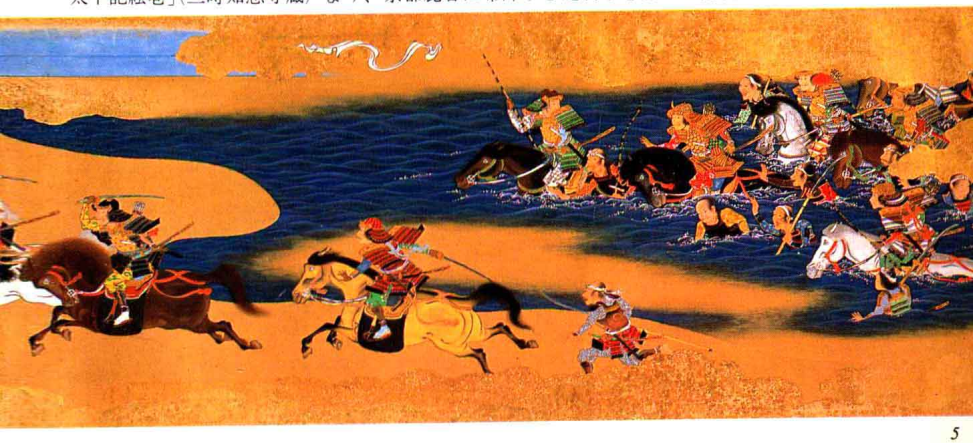


「太平記絵巻」（東京国立博物館蔵）より、足利軍を攻める新田義貞軍

傍に武具を集めて、士卒を逞す。媚を成し、交を結ぶ輩には、忠無きに賞を申し与へられける間、文観僧正の手の者と号して、党を建て臂を張る者、洛中に充満して、五六百人に及べり。

このまま朝廷一統の天下が続いたら、諸国の地頭や御家人はみんな「奴婢・雑人」にもひとしい身のうえになってしまう。いっそのことどんなことでも起こって、武家が再び天下を執って欲しいと思う人が多かった、とさえ書かれている。建武の王権確立のために働いた兵士の中には文観がらみのならず者がたくさんいて、わが者顔で宮中を歩き回っていたようだ。京都には風紀の乱れた宮廷を風刺する落書が至るところに現われ、それは『太平記』の中に取り込まれている。やむごとなき人々の世界に聖俗の見分けのつかない連中が出没するあたり、建武の新政の異様さを物語っているが、まさにそれを反映して、『太平記』自体も聖俗混じり合ったポリフォニックなテクストになっている。二条河原の落書と菅原道真公のエピソードが隣り合うようにして挿入されているのだから。しかし、二条河原の落書のように、都で追い剥ぎ

「太平記絵巻」(三時知恩寺蔵) より、京都鹿谷に布陣する足利軍を攻める南朝方山名軍



や強盗がはやるほど治安が悪かったら、京都はさしずめ魔界都市のようなありさまだったに違いない。落書を書いた人々はけっこう醒めた目で時代と接していたようだ。

『太平記』はそのタイトルが示すように太平の世を希求する名もなき者たちの声が物語の随所に響いているが、やはり軍記物ゆえ、合戦のシーンが抜群に面白い。ゲリラ的奇襲で知られる楠正成の活躍は講談では尾ビレをつけられ、派手に物語られるが、巻の十六、正成兄弟の討死には涙を誘われる。敵軍に自軍を分断させられ、とりあえず前面の敵を蹴散らそうと、兄弟申し合わせる。この時すでに自軍の敗北を互いに悟っているのだ。

兄弟は敵の質を吟味しつつ、質のよい敵とは組み合い、首を取り、相手にとって不足な者は追い散らしつつ、戦塵の中で互いに七度出合い、別れ、敵の大将左馬頭（さまのかみ）を追うが、相手の軍勢は五十万、楠勢はわずか七百である。命がけで大将を守らんとする薬師寺十郎次郎も現われ、敵軍の士気は上り、遂には楠勢を包囲し、六時間、十六度にわたる白兵戦のすえ、とうとう楠勢も残るは七十三騎となり、ここで正成兄弟は自害を決する。民家で兄弟は末期の会話を交わす。

——臨終の一念で来世の生の善悪は決まるそうだな。

「楠木正行と弁内侍」（如意輪寺蔵）。後村上天皇のお召しで吉野に赴く途中、正行は高師直に掠われようとしていた女房弁内侍を救出し妻とする話が説話集『吉野拾遺』に載っている

この世九界のうちにあって、お前は何に生れ変わりたい？

と兄正成が問うと、弟正季は〝カラカラ〟と笑って答える。

――七度生れ変わってもやっぱり人間界に生れて、朝敵を滅ぼしたいものです。

兄正成もその意に同意し、兄弟差し違えて死ぬ。軍記ロマンのクライマックス！

一方、新田義貞は足羽の合戦の前に自分が蛇になる夢を見る。ここでそれをめでたい夢と判ずる人と、凶事を告げると解釈する夢読みが現れる。後者の夢読みは諸葛孔明の故事を引き、不吉な予告をする。さらに義貞の馬は騎乗を拒み、足羽河では旗手の馬が水中に倒れる。馬も義貞に凶事を告げたのだ。

この合戦で義貞は眉間に矢を受ける。致命傷と判断した義貞は太刀を左手に持ち変え、自ら首をかき切って泥田に果てた。

巻の二十一、塩冶判官の讒死のくだりには足利尊氏の側近高師直が登場する。こいつは塩冶判官の女房に想いをかけ、あの手この手で口説きにかかる。国の十や二十とひきかえにしても美人を頂戴したいとうそぶくほどの

正平三年（一三四八）、後村上天皇が吉野から皇居を移した賀名生の行在所趾

ドン・ファンだから、つれない奥方にしつこく食い下がる。兼好法師に頼んで手紙を書かせたり、奥方の侍従に取り入って、湯上りの奥方をのぞきに行ったりする。半裸の奥方に目がくらみ、ますます恋の病が重くなった師直は邪魔者の夫、塩冶判官をおとしいれる。陰謀の計画があると根も葉もない噂に判官は師直と一戦を交えて死のうと決心する。

奥方を生け捕りして判官を討ちとろうとする師直軍だったが、奥方一行は無惨な最期を遂げる。これを聞いた判官も馬上で切腹して後を追う。

六十年間、東北から九州まで各地で続いた南北朝の動乱だが、これほど一切の価値をぐらつかせた時代も珍しい。動乱のさなか、武士も百姓も商人も悟っただろう、よりどころとなる権威などないことを。素朴な主従関係も計算ずくの損得勘定に変わってしまったわけだ。『太平記』がことさらに説教臭いのはそんな時代背景を嘆く気持ちからかも知れない。

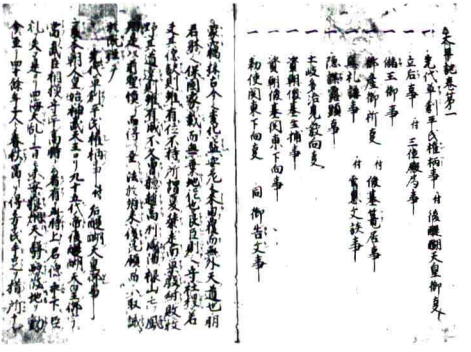
南朝が立籠った吉野の春

足利尊氏木像（鑁阿寺蔵・学研提供）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『太平記』の世界

後醍醐院木像（天龍寺蔵）。歴代天皇の中では、波瀾に富んだ生涯を送った天皇。風貌の特徴からその強い意志と激しい気迫がうかがえる



『太平記』序（筑波大学附属図書館蔵）

前ページ＝「騎馬武者像」（文化庁保管・学研提供）。足利尊氏の出陣図とされてきたが、この絵の上部に義詮の花押があり、現在は高師直最後の戦いの姿という説もある

■動乱時代の歴史叙述

爰ニ本朝人皇ノ初、神武天皇ヨリ九十五代ノ帝、後醍醐天皇ノ御宇ニ当テ、武臣相模守平ノ高時ト云者アリ。此時上乖ニ君之徳一、下失ニ臣之礼一……。

（わが国最初の帝神武天皇から数えて、九十五代目の後醍醐天皇の時に、武臣相模守平〈北条〉高時という者がいた。この時天皇は「君の徳」にそむき、武家は「臣の礼」を失

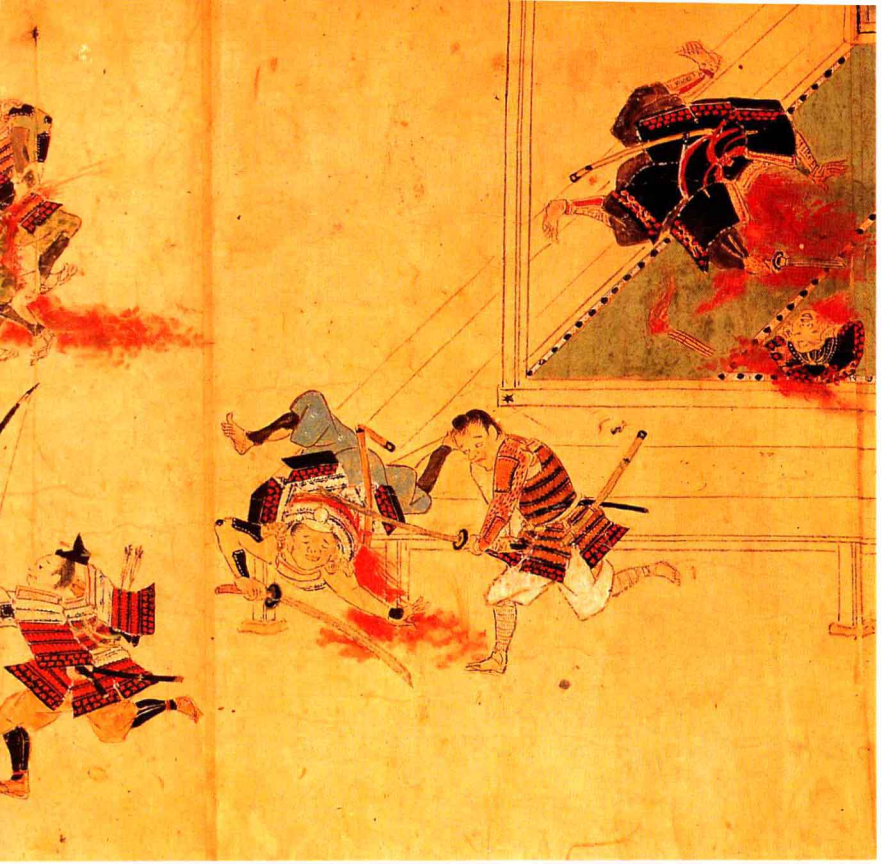
った。）

鎌倉時代の末にはじまり、半世紀に及んだ十四世紀の動乱の世を克明に描いた『太平記』は、自らの世界をこう語りはじめ、つづいて次のように述べる。〝そのため天下は大いに乱れ、一日として安らかな日はなかった。反乱の急を告げる狼煙は空を覆い、合戦の鬨の声は大地をゆるがし、今に至るまで四十余年の間、人々は身の置きどころもないありさまであった〟と。

動乱の時代を描く『太平記』は、この書きだしから個性的である。それは、同じ軍記文学の『平家物語』が、平家一門の興亡の歴史を、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」と、七五調の抒情的リズムをもって、仏教的無常観から説き起こしたのと比べると明らかである。『太平記』には、為政者、権力者の治政を糾明するといった、動乱の世を描くにふさわしい歴史への鋭い切り口がある。また、漢文訓読調の、硬質ではあるが風格をそなえたリズムがある。そして『太平記』は、歴史解釈の方法を儒教的政道論にもとめており、世の中が治まったり乱れたりする原因は、君と臣の政治の是非にあるとみる。

北条高時木像（宝戒寺蔵）。北条高時は、十四歳で幕府の執権職を継いだが、幼少のため金沢貞顕が後見役をつとめた。そのため、田楽や闘犬に親しみ、憂さをはらしたという。その当時から「政道ハ正躰ナシ」、「頗亡気ノ躰」という評価をうけていた

『平家物語』冒頭（慶応義塾大学付属斯道文庫蔵）



そのことは『太平記』の巻頭におかれた「序」（漢文）が表明している。書き下してみると、

蒙竊ニ古今ノ変化ヲ採ツテ、安危ノ来由ヲ察ルニ、覆ウテ外ナキハ天ノ徳ナリ。明君コレニ体シテ国家ヲ保ツ。載セテ棄ツルコトナキハ地ノ道ナリ。良臣コレニ則ツテ社稷ヲ守ル。若シソレソノ徳欠クルトキハ、位有リトイヘドモ持タズ。……其道違フトキハ、威有リトイヘドモ久シカラズ……。

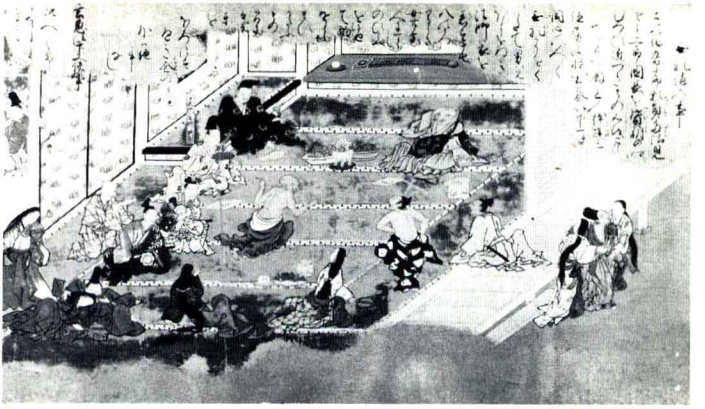
（昔から今に至る歴史の中で、国家の興亡の由来を考えてみると、すべてのものを公平に覆うのが天の徳である。すぐれた君主はこの徳を体得して国家を保つ。また、万物を公平に載せて育てるのは地の道であり、立派な臣下はこれを手本として国家を守る。だから、君がその徳を欠くときは、位を保つことができないし、臣下も道を踏み違えると、威勢があっても長続きしない。）

これは、治乱興亡の歴史に貫く法則を述べたものであるが、『太平記』は、半世紀に及んだ動乱の現実を、この法則によって理解しようとする。「序」につづく巻一冒頭の叙述が、四十余年に及んだ天下の動乱を語って、後醍

「芦引絵巻」（逸翁美術館蔵）。南北朝時代の物語絵巻。当時の戦闘の様子がしのばれる

醐天皇と北条高時の治世（君臣の徳と礼）を問題にしたのも、この法則で十四世紀の歴史を解釈したものであった。世の治乱と、為政者の治世との関係を法則的にとらえ、その視点から歴史の展開を見通そうとするところにも『太平記』の個性を認めることができる。

動乱の世を目のあたりにして、太平を期待する人々（『太平記』作者）の心は、為政者の政道を問題にせざるをえなかったのである。



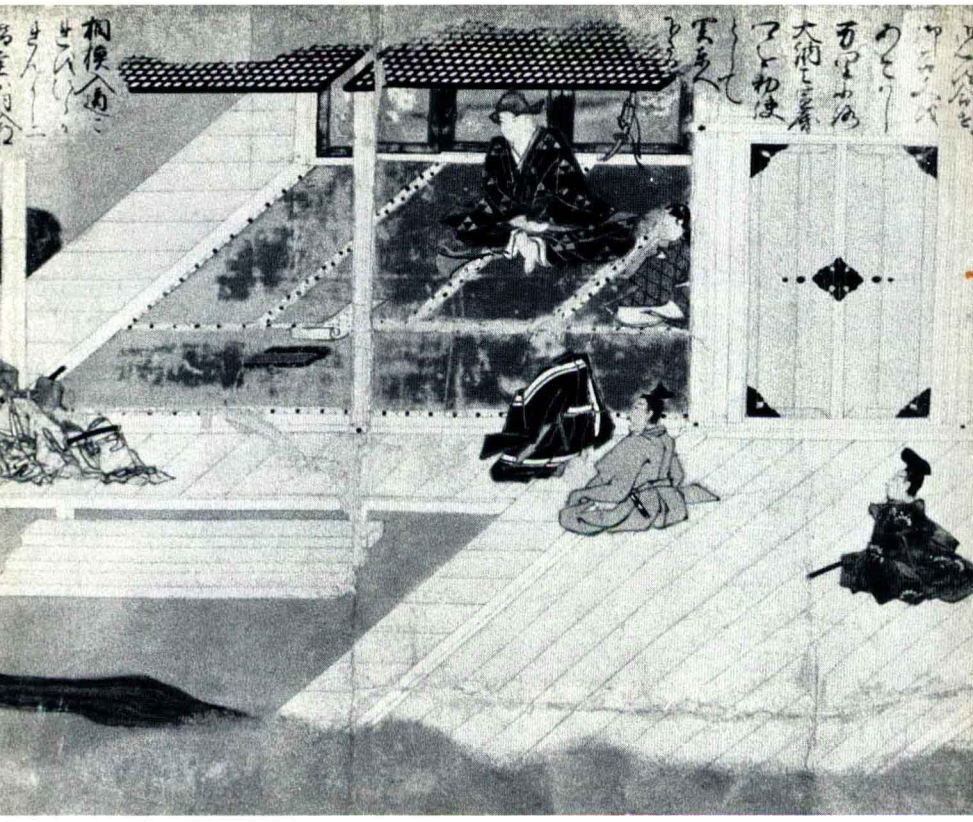
「太平記絵巻」（埼玉県立博物館蔵）より「無礼講の図」。討幕陰謀を企む日野資朝らは、土岐・多治見らを語らい、本心を知るために無礼講を催した。男は烏帽子を脱ぎ、僧は衣を着ず、膚きよらなる女に酌をとらせて遊び戯れながら、討幕の本音を互に語り合った

「花園天皇宸記」（宮内庁書陵部蔵）。元亨四年九月十九日に起こった正中の変について記す。無礼講についても触れている

■天皇御謀叛―正中の変

動乱時代を出発させたと、最初に問題にされる天皇後醍醐と北条高時の治世はどのようであったろうか。まず、後醍醐天皇については、「三綱五常の道」（君臣・父子・夫婦の道と、仁義礼智信の五徳）を守り、政務を怠らず、延喜・天暦の聖代を理想として勤めたから、生れながらの聖君子であると万民はその徳化をたたえ、生活を楽しんだ。たとえば、大旱魃がおこって飢死者が巷にあふれたときも、自ら帝王の徳が欠けていることを嘆き、朝の食事をやめて窮民に施し、米価の高騰を押えたし、訴人があれば自分で記録所に出て理非を明らかにした。一方、幕府の実権者北条高時は、行状が軽薄で政道不正、遊びに呆けて祖先の偉業を傷つけるといったありさまであった。だから、――と『太平記』は言う。この時に至って、天下の実権が武家から天皇へと移る転換期、すなわち、「天地命ヲ革ムベキ」〝革命〟の「危機」がここに顕われたのだと。

しかしながら、聖人君子に匹敵するほどのこの天皇も、権謀をもって事にあたり、覇道をあゆんだから、その権力は三年ともたなか



「太平記絵巻」（埼玉県立博物館蔵）より鎌倉幕府最後の執権北条高時をかこむ武士たち

ったと、つづいて説いている。

その「革命」の危機は、天皇の陰謀から始まった。朝廷の権威がすたれたことを嘆く天皇は、幕府の討伐を企図したが、事が漏れることをおそれて、日野資朝や蔵人の俊基ら数人の者に相談して準備を進めた。中でも俊基は密かに諸国をめぐり、美濃国の土岐・多治見（源氏の武士）らを語らったが、その本心を知るために「無礼講」を催したりした。こうして、六波羅探題（京都におかれた幕府機関）への襲撃は、北野社の祭の日、九月二十三日と定められた。祭の警護に武士が出払った留守をねらおうというのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com